

TOSAIBOTIMES

2008年7月5日発行
編集者：TOSAIBO TIMES 編集委員会
編集長：生原 勇
発行者：上原 泰男
東京災害ボランティアネットワーク
〒164-0011 中野区中央 5-41-18
東京都生協連会館 3階
tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615
E-mail:office@tosaibo.net

2008年度総会が開催されました



2008年5月31日(土) 12:30より田町交通ビル会議室にて「2008年度東京災害ボランティアネットワーク(以下東災ボ)総会」が65団体(委任参加含む)の参加で開催されました。その後第二部として、東災ボ設立10周年記念シンポジウムが同ビル6Fホールにおきまして132名が参加し開催されました。テーマは「首都東京の災害に備える～連携と協働のあり方」として、東災ボを構成する団体からの取り組みが報告されました。(詳細は2頁をご参照ください)

東災ボ総会は、連合東京ボランティアサポートセンター荒井さんの司会ではじまり、主催者を代表して東災ボ副代表の連合東京遠藤会長が挨拶、来賓には東京都生活文化スポーツ局都民生活部小笠原部長より挨拶をいただきました。その後議長に東京YMCAの沖さん、(社)シャンティ国際ボランティア会の白鳥さんが選出され、2007年度事業報告、同決算報告、2008年度の事業計画、並びに予算案が満場一致で確認されました。中でも、2008年首都圏統一帰宅困難者徒歩帰宅訓練は9月23日(火・祝日)で開催する予定であり、具体的には実行委員会を設置し検討することが確認されました。

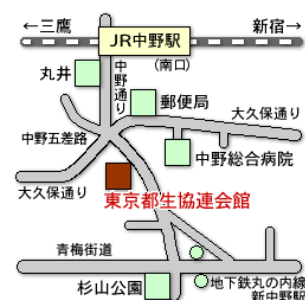
最後に閉会挨拶として、東災ボ山崎代表より、「東災ボは限られた予算の中で、参加団体の協力の上に成り立っている、特に事務局の上原さん・福田さんには本当に苦勞をかけているが、今後も引き続き東災ボへの支援を願いたい」と挨拶し、総会を終了しました。(真島)

東京災害ボランティアネットワーク事務局

〒164-0011 中野区中央5-41-18 東京都生協連会館3階

tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615

E-mail:office@tosaibo.net



首都東京の災害に備える

連携と協働のあり方を考える

2008年5月31日午後、田町交通会館において、東京災害ボランティアネットワーク2008年度総会に引き続き、「首都東京の災害に備える～連携と協働のあり方～」をタイトルとした市民防災シンポジウムを開催いたしました。

東災ボは、阪神・淡路大震災の被災者支援活動を経験した多様な団体の皆さまと共に、首都東京の災害に備えることを目的に1998年1月に設立され、本年は10年目の記念の年です。

その記念のシンポジウムでは、共に歩んだこの10年を振り返りました。それぞれの団体内での組織的災害対応力の現状報告をおこなうと共に、この間の協働活動を通じて

団体間連携の意味を再確認し、本格的な東京の災害への備えを具体的課題として気づき合い、今後の東災ボの歩みの道筋を確かにするをテーマに開催されました。

したがって今回のシンポジウムのパネリストは東災ボの役員団体責任者の方々にご出席願いました。各団体からは事前に報告レポートが提出され、会場配布がおこなわれ、その報告集は22ページにも及ぶ貴重な報告集となりました。

パネリストは、東京ボランティア・市民活動センターの山崎美貴子所長、東京YMCAの沖利柯東陽町センター館長、連合東京の遠藤幸男会長、東京都生協連の名和三次保会長理事、シャンティ国際ボランティア会の茅野俊幸専務理事がご多忙の中ご出席くださり、進行は東京災害ボランティアネットワーク事務局を務めさせていただいている上原が担当しました。

シンポジウムは三部構成で進行了しました。

第一部では、1995年の阪神・淡路大震災での被災者支援の取り組みとその経験を通じて学んだ教訓を中心に各団体から報告をいただきました。ここでの報告では、組織内全国ネットワークを活用しての長期にわたる大きな支援



活動がおこなわれましたが、他団体との連携が不十分であり、団体内の災害対応力の向上と共に、他団体との連携の必要性が共通の課題として指摘されました。

第二部では、東災ボ設立以降の各地の被災者支援活動と、三宅島噴火災害被災者支援活動、更には首都圏での帰宅困難者対応訓練をはじめとする協働活動を通じての各団体内「連携と協働」活動への評価をテーマに進められました。この中では多様な団体の専門性が発揮された事例が多く語られました。多様な団体間の連携の中でこそ発揮される相乗効果が、被災者支援活動や防災・減災活動にとっても重要であるという認識を共有することになりました。特に、三宅島噴火災害被災者支援活動は、その特徴的なケースとして語られました。

第三部では、「東京の災害に備える」取り組みの具体的諸準備の一面が報告され、引き続き人材養成、各団体の専門性の深化とネットワークの充実、首都災害への図上訓練と課題抽出の実施、団体間の人材交流、更には帰宅困難者対応訓練等の協働活動を通じて実現しつつある「連携と協働」の具体的推進が提言されました。

様々な経験が語られ、その中から今後の提言がおこなわれました。共通して語られたことは、各団体内での引き継ぎの努力を基に、多様な団体がそれぞれの個性を生かしつつ、各団体の特性をつなげ、その力を最大限に活かす「連携と協働」のネットワーク機能を高めることが重要だという見解です。役割・立場・個性の違う団体がネットワークしている東災ボへの期待とも受け取れます。

この10年の歩みを共に振り返りつつ、新たな課題へ共に取り組む方向を再確認する、とても有意義なシンポジウムとなりました。
(上原)



当日はあいにくの雨模様となってしまいましたが、100名を超える方々の参加がありました。

2008年首都圏統一帰宅困難者対応訓練

2007年11月17日、日比谷公園には、約2000名もの訓練参加者がありました。これまで東災ポでは毎年東京を舞台とした帰宅困難者対応訓練を実施していました。しかし、災害時における帰宅困難者課題は東京だけの課題ではなく、千葉・埼玉・神奈川を含めた首都圏にとって重要な課題であることから、2007年、首都圏統一とし、これまでの取り組みをさらに広げる形で帰宅困難者対応訓練を実施しました。



昨年の訓練では約2000名の方が徒歩帰宅訓練に参加くださいました。スタート地点となった日比谷公園の様子。



昨年の訓練の実施報告書の表紙。訓練参加・協力団体、東災ポの参加団体の皆さんはもちろんのこと、関係団体の皆さんにも配布させていただいております。

この取り組みは、単に帰宅困難者課題に対応するための訓練だけではなく、市民・企業・行政・関係団体が連携と協働をもって作り上げていく市民型防災・減災訓練としての側面を持っていると、実行委員団体をはじめとする参加された多くの団体の皆さんから、大きな評価をいただくことができました。

そして、2008年、昨年と同様に首都圏統一で帰宅困難者対応訓練を実施することが決定しました。日程は2008年9月23日(祝日)、コースは昨年に引き続き、日比谷公園をスタート地点に、千葉県・埼玉県・東京都・神奈川県に向かう主要街道です。

すでに、昨年の実行委員団体のの方々を中心に、2008年6月2日に第一回実行委員会を開催し、6月30日には第二回実行委員会を開催させていただき、開催に向けて準備を進めております。

今年は、各コースのゴール地点となる、千葉県浦安市、埼玉県和光市、東京都調布市、神奈川県川崎市の皆さんが訓練の趣旨を理解してとても積極的に参加・協力くださっています。行政と市民の連携・協働の新しい第一歩となるよう実行委員会としても心強い思いを持っています。

帰宅困難者課題は、市民レベルでの対応だけでは不十分であることは間違いありません。この訓練を通して、市民・企業・行政・関係団体の方々が見える関係を作り、知恵を出し合える環境を作っていければと考えております。

訓練当日はもとより、訓練の準備段階から、この訓練に参加くださる団体を募集しております。是非、各団体でご検討いただければ幸いです。

(フクタ)

2008年首都圏統一帰宅困難者対応訓練

日時：2008年9月23日(祝)

場所：スタート地点 日比谷公園

ゴール地点 千葉県浦安市

埼玉県和光市

東京都調布市

神奈川県川崎市

なお、この訓練は実行委員会形式で企画・運営がなされています。実行委員会への参加は自由ですので、是非実行委員会に参加していただければと思います。

第三回訓練実行委員会

日時：7月23日(水)15:30~17:00

会場：会場については、東災ポ事務局にご連絡ください

ミャンマーサイクロン・四川大地震について

2008年5月、アジアの2カ国で大きな被害をもたらした災害が発災しました。5月2日にミャンマー(ビルマ)でとても大きなサイクロンが、5月12日には中国四川省で大地震が発生し、多くの方が犠牲となってしまいました。

東災ポでは、この二つの災害後の5月18日、新宿駅東口で緊急被災者支援街頭募金活動を実施しました。短い時間ではありましたが、23名の方々が参加くださり、74,601円の募金が集まりました。これらの募金は、ミャンマー、四川省で被災者支援活動を決定していたシャンティ国際ボランティア会(SVA)、東京YMCAを通じて被災者支援活動資金となります。街頭募金後も、ことあるごとに募金活動をさせていただいている東災ポです。その後の現地の状況・活動について、SVA・東京YMCAから報告をいただきました。

5月2日深夜にミャンマー(ビルマ)南西部を襲ったサイクロン・ナルギス。死者・行方不明者約13万人、240万人の被災者を出す大惨事となりました(6月11日国連人道問題調整事務所発表)。サイクロン発生から約2ヶ月が経過した現在でも、腐乱した遺体が散乱している地域があり、何とか命が助かった人たちもわずかな支援物資を分け合って飢えをしのいでいる状況です。

SVAでは被害の大きさに鑑み、生き残った被災者の命と生活を支えるために、現地NGOの連合体で結成された緊急支援チーム「Emergency Assistant Team/ EAT- Burma」と連携し、被災直後より緊急救援物資の配布を行っています。東災ポでの募金活動を通じて、ご支援をいただき有難うございました。みなさまからの温かいお気持ちを確実に被災者のもとに届けるべく、今後は物資配布に加え、子どもたちへの支援を中心とした更なる支援活動も検討中です。引き続き、みなさまのご協力をよろしくお願い致します。(SVA)

ミャンマーサイクロン



いのちを支える



四川大震災(中国)

全国の被災者支援活動を東災ポボランティアネットワークは応援します。全国の被災者支援活動を東災ポボランティアネットワークは応援します。全国の被災者支援活動を東災ポボランティアネットワークは応援します。全国の被災者支援活動を東災ポボランティアネットワークは応援します。

緊急被災者支援街頭募金活動で作成したチラシ。写真はシャンティ国際ボランティア会と新華社通信からお借りして作成しました。同封させていただいているチラシは街頭募金時(2008年5月18日)のものです。

東京災害ボランティアネットワークとは？

1995年の阪神・淡路大震災を契機に、1998年1月に設立されたボランティアネットワーク。災害救援活動や防災・減災活動、ボランティア団体やNPO団体に限らず、様々な形で様々な課題に向かって活動している団体が、災害前に「顔の見える関係」を構築していくことを目的としている。構成されている団体は、ボランティア団体・NPO団体をはじめ、労働団体、消費者団体、社会福祉団体、海外支援NGO、企業と多岐にわたる。

これまで1998年福島豪雨災害や2000年三宅島噴火災害、2004年新潟水害、新潟県中越地震、2005年三宅島帰島支援など、様々な被災地で被災地支援活動・被災者支援活動を展開。

また、各被災地で気づかされたことを東京での防災・減災活動に生かし、都道府県行政、市区町村行政、社会福祉協議会、企業、そして地域の学校・町会などの地域団体と共に、災害といのちとくらしを想像して、考えて、実践していく小さな「気づき」の取り組みを実施している。

2008年7月現在80の団体が参加。

中国・四川省大地震 被災者支援活動へのご協力に感謝いたします。

5月12日に発生した中国・四川省大地震から2ヶ月が経ちました。多くの死者・行方不明者が生じた一方、膨大な被災者が現在でも大変に困難な生活を強いられています。中国のYMCAでは、被災地への緊急支援による初期対応からはじめ、現在ではこのような苦しみや悲しみを抱える一人ひとりの生活に寄り添い、生活を守る中・長期的な対応へと移行をしています。

四川省の成都にある「成都YMCA」では、YMCAの建物と、震源地に近いジンタン地区で運営をしている孤児施設が被災をしました。孤児施設の子どもたちには、“安心して過ごせる場所の確保”を第一優先として対応がなされています。また、成都YMCAには今後、震災で孤児になった子どもたちや被災家族の子どもたちなどへの支援が期待され、それぞれに準備が進められています。

被災地はこれから、長い時間をかけて生活の復興に取り組んでいかななくてはなりません。YMCAは、それぞれの地で活動を続ける“地元のコミュニティー団体”として、被災をした人々に寄り添い続けます。

みなさまのご協力に心より感謝申し上げますと同時に、今後も被災した人々のことを記憶に留め、継続的な支援をいただきますよう、お願い申し上げます。(東京YMCA)

編集後記

「なにごとのおはしますかはしらねども かたじけなさにみだこぼる」と西行が歌った伊勢神宮を六月半ばに訪れました。突然に思い立ち、奈良行きの夜行高速バスに飛び乗ったまでは良かったものの、そのあまりの密閉ぶりに閉所恐怖症に襲われ、降ろしてもらい大垣行きの夜行快速電車と新幹線乗り継ぎ、なんとか最初の目的地天理にたどり着きました。13年ぶりの天理。その後大阪の釜ヶ崎へ。先日の「騒ぎ」の余燼はなにもなし。そして、お伊勢さんへ。13年ぶりの天理も懐かしかったが、やはりここは別格。宇治橋を渡り鳥居の柱に両腕を差回し頬を寄せると、えも言われぬ穏やかな気持ちに導かれていきます。トインビーの記帳の言葉「……あらゆる宗教の根底的な統一性……」を持ち出すと、議論のネタを提供することになるでしょうから、僕はただただ「かたじけなさ」に感謝するばかりです。「連携と協働」は東災ポの根幹となる言葉ですが、そこには他者への深い共感と己の無力さの自覚がなければならぬと思います。昨年は(も?)総会後に2号出してTOSAIBO TIMESは閉店しました。今年は3号まで出しますという、叱られそうですから、気張らずに気張りますと「決意表明」しておきます。(なり)